

ATTENTION

円安の流れは止まらない。1ドル200円もあり得る。

円ドルレート（1980年～1989年）



円/ドルレート（1990年～2024年）



円安が急速に進んでいます。29日には、一時1ドル160円台に突入しました。34年ぶりの円安と連日報道されていますが、34年前の最安記録(月次)は159円。それを上回ったのです。この159円を超えると、次の記録は、1986年12月の160.1円。1985年9月のプラザ合意を経て、急速に円高になっているときです。財務省は、盛んに市場介入を匂わせていますが、マーケットは、それを睨みながら、円売り姿勢を強めている状況です。しかし、おそらく、財務省による円買い介入は、一時的には円高に振れても、歯止めをかける効果は薄いでしょう。世界の為替市場の取引は巨大で、政府が介入しても、砂漠に水をまくようなもので、効果はすぐに消えます。また、欧米の先進各国のながめ方は、日本政府の単独介入は「やりたければどうぞ、ただあまり効果はないでしょう」というところでしょう。マーケットでは、日米金利差が、為替の円安要因とされていますが、そんな表面的なことが主因ではありません。もっと根深いところに原因があります。GDPの2倍を超える国家債務、その半分以上を日銀が抱える異常さ。金利を上げようにも、国の債務が多すぎて、金利上昇は財政破綻を引き起こしかねない。まさに「前門の虎、後門の狼」の状況に、日本は追い込まれていると見るべきです。人口減少は、今後長い間続くのは明らかです。こういったファンダメンタルが、中長期で為替を動かしているのです。1ドル160円を超えれば、節目といった節目はなく、1ドル200円に向かってまっしぐらということが現実となりかねません。プラザ合意時に日本の競争力を恐れ、米国の円高に強硬に仕向けたわけですが、日本の国力が衰えた現在、1ドル200円台の円安になっても、米国は痛みを感じないでしょう。

COLUMN

隠れた可能性-あなたはできる

誰でも、無限の可能性を持って生まれてくるのだが、それが使われないままになっている。ペンシルベニア大学ウォートン校の教授が、どうしたらそれを取り込み、大きな成功をおさめられるかを著した書がありましたので紹介しましょう。それは誰でもできるということです。

“だれでも隠れた可能性を持っている”。大変励まされる言葉です。そしてそれを取り出すには、人間に本来求められる資質-すなわち「決意と鍛錬」が必要とのこと。これらは、誰をも、学び、成長し、高いレベルで物事を達成できるようにする。そして、この心構えとともに、自分の気持ちのコントロールと学べる環境が必要といっています。これらがあれば、だれでも「青天井」で伸びるということです。伸びる可能性は、生まれつきではなく、日ごろの研鑽、鍛錬がものをいう。未知の分野にも前向きに取り組み、新たな知見を得ようとするマインドを養う。知識・情報をスポンジのように吸引しようということです。

著者は説いています。自分が本当は何をやりたいかを自問しよう。そして、それを見つけたら、そのスキルを磨く。好きなことをするので、おのずとそのスキルは上達するというのです。そして著者は、そのための環境を整えることが大事としています。

要は、自分の可能性に蓋をするなということ。自分がやりたいことを見つけたら、それを徹底的に学び、上達する鍛錬をする。やらされてやるより、自分がやりたいことをやる。こうすれば、よほど達成する成果は大きくなり、世の中にもっと多くのことを還元できるといっています。

参考図書：Hidden Potential by Adam Grant

MARKET

(4月末)

(3月末比)

日経平均

38,405.66円 -1,963.78円 (-4.86%)

NYダウ

37,815.92ドル -1,180.47ドル (-3.03%)

米ドル

157.85円 +6.40円 (+4.23%)

私の書棚より

結果の全貌が何日もたたないとわからないようなことを積極的にやろうという人々の決断は、ほとんどがアニマルスピリットの結果でしかない。これは手をこまねくより何かをしようという、自然に湧いてくる衝動である。

『雇用、利子、お金の一般理論』ケインズ著

日本の国力の衰えが著しい真因

Attentionの欄で、今後も円安が進むとして、その様々な要因を上げましたが、底流に厳然と流れているのは、日本の国力の衰えです。世界2位だったGDPは、中国に抜かれ、ドイツに抜かれ、さらに、もうすぐインドに抜かれ、世界5位に落ちるのは確実な状況です。この国力の衰えというのは、数十年にわたる経過を経て出ているもので、そう簡単に覆りません。どうしてここまで国力が衰えたか、いくつかの重要な要因を上げてみましょう。

1. プラザ合意での円高容認と日米貿易摩擦の全面譲歩

1985年9月G5の蔵相が集まったプラザ合意で、日本は一方的な円高への誘導を唯々諾々と飲み1ドル240円だった円は、一気に150円台まで急激な円高になり、日本の輸出競争力を大幅に削いだのです。日米貿易摩擦では、日本は米国の要求を丸のみし、日本企業の輸出競争力は大きく後退しました。中国は、この時の日本の対応を反面教師として、現在、米中貿易摩擦に、決して譲歩しない姿勢を見せています。一方で、米国は、日本と同様に徹底的に叩き潰すという姿勢を見せているので、厄介なのです。

2. 官僚主導の国家運営が連続と続く

日本企業は大企業、中小企業とも、役人の顔色を見ている傾向が強く、官僚も、我々が動かないとだめだという固定観念が強く染みついているようです。一方で、官僚は、うまくいなくても責任は取らず、企業は泣き寝入り。こういう傾向が、ずっと続いているのです。これでは先の展望は見えません。企業はお上の顔色伺いで、革新的、創造的な動きが出ないまま来たのです。

3. 規制改革は先細り、膨らんだ国家債務は見ない振り

小泉政権時、国の債務を減らし、規制を大幅になくすといった改革意欲を強く感じたのが、安倍政権になるとしほみ、国の債務はどんどん増え、規制改革はどこかに行ってしまう。既得権益が、のうのうとのさばったのです。これでは、大胆な構造改革などできるわけがありません。身体(国・企業)の新陳代謝が働かないまま来たということです。

4. 将来の生活が不安で、子どもづくりに自信が持てない

久方ぶりに給料が上がったのは大変喜ばしいことですが、十分ではありません。この程度では、二人三人と子どもを持って大丈夫と考える夫婦は少ないでしょう。現在の年金は、暮らすには最低限の額で、物価が上がったのに比べて、年金支給額は追いついていません。また現役世代のほとんどは、将来受け取る年金は減るだろうと見ています

5. 1990年以降、日本全体が時間を無駄にした感が強い

1990年代、不良債権問題になかなか手を付けられず、傷を大きくしてしまったように、日本全体が、根本的な問題に手を付けず、30年以上にわたり、先送りしてきた感を強く感じます。株の持ち合いなど、いまだに問題のままになっています。いわば、ゆで蛙の状態、いまに至っているということです。そしてまだ、先に明るさが見えない状態です。

日本がよかった時代は、1982年に発足した中曽根政権までです。この政権時、行財政改革を断行し、土光臨調が、国鉄、たばこ、NTTを民営化、政治はこうあるべきという姿を見せたのです。その後は、戦後経済の成長は止まり、現在に至っていると見るのが妥当です。

まかせて安心、資産運用のホームドクター

- 大切なお金を間違いない方法で運用しているのか、心配になることはありませんか。
- 退職後のセカンドライフを、お金の心配なく、ゆとりを持ってお過ごしですか。
- 仕事が忙しくて、なかなか運用まで手が回らないということはありませんか。
- 銀行や証券会社が勧めるままに、株や投資信託を購入していませんか。

金融商品の中身や手数料がどうなっているか、きちんと把握していますか。

びとうファイナンシャルサービスは、金融機関から完全独立のFP・資産運用アドバイザーです。その強みを生かし、お客様に、客観的で、公正・中立なアドバイスを提供しています。手数料が高く売りやすい商品をお客様に売っていただくのではなく、お客様にもっとも適した金融商品をお客様にベストのアドバイスを提供しています。

びとうファイナンシャルサービスは、お客様の目標や夢の実現のため、40年を超える長い経験と深い専門知識、高い倫理観のもとに、お客様の利益のみに目を向けたサービスを提供しています。たとえるなら、多くのお客様の人生という航海で、無事に目的地に到着する大型客船であり、いつもお客様の資産運用という面で健康管理をするホームドクターです。



びとうファイナンシャルサービス
代表 尾藤 峰男
公認投資助言者(RIA)

びとうファイナンシャルサービス 公式HP

<http://www.bfsc.jp>

あなたの資産運用を成功に導くメルマガ！

お申し込みは <http://www.bfsc.jp/mailmagazine/>

発行者：びとうファイナンシャルサービス

代表取締役 尾藤峰男

電話：03-6721-8386

携帯：070-5567-3311

電子メール：info@bfsc.jp